

Of Human Bondage における 〈Maugham 自身〉について

佐 藤 匡

1

〈Maugham 自身〉という表題は、J. Beecroft による Maugham 選集、*Mr. Maugham Himself* (Doubleday, 1954) からえたものである。その序文で Beecroft 氏は、*Why Mr. Maugham Himself?* と題しているその由来をのべている。それによると、Maugham の代表作集をあもうとしたが、すでに Maugham 自身が *The Maugham Reader*¹ という選集をだしていたので重複になるのでまよった時、*Teller of Tales*² の Maugham の序文に “For what in the long run has the writer to give you?” という質問に Maugham 自身、“Himself” と答えたことを見出して、別の種類の本と、そのタイトルのヒントをえたそうである。したがって出来あがったものは、Maugham の代表作選集ではなくて、彼の個性、彼の人生観が作品を通じてよくあらわれている *Of Human Bondage, The Summing Up*, 其の他のいくつかの短篇が合成されて一つの伝記的選集となっているのである。

又、R. Cordell 氏は、*Somerset Maugham*³ の第三章で *Three Autobiographical Novels* と題して *Of Human Bondage, The Moon and Sixpence, Cakes and Ale* について敬服すべき的確な背景的知識をあたえ、最後に⁴つぎのようにのべている。

It is probable, however, that we learn more about Maugham from his books (especially the novels) than we learn of most authors from their own writings and we shall some day have the autobiography, or autobiographical fragment,⁵ he is now writing for publication after his death. Until a detailed,

documented life of Somerset Maugham appears — and a few years hence there will be a number of biographies — *Of Human Bondage* will provide a satisfactory account of Maugham as a young boy and as a medical student.

Cordell 氏の本意は、前の Beecroft 氏の意図を充分にくみ、かつ、資料的知識を駆使して Maugham に接近をみせる二段構えの用意を示そうとするものである。この論文の筆者は Beecroft 氏にならって資料面のアプローチよりは、むしろ、この作品をとおしてみられる Maugham の内的要素についてふれることにする。そして、つぎのようにのべている Maugham 自身の言葉を頼りにできる強力な支えとして、一つの試論をすゝめていきたいと思う。

It (= *Of Human Bondage*) is not an autobiography, but an autobiographical novel; fact and fiction are inextricably mingled; the emotions are my own, but not all the incidents are as they happened and some of them are transferred to my hero not from my own life but from that of persons with whom I was intimate. The book did for me what I wanted, and when it was issued to the world (...) I found myself free from those pains and unhappy recollections. I put into it everything I then knew and having at last finished it prepared to make a fresh start.⁶

2

この作品執筆の Maugham の動機から考えていこう。*The Summing Up* の第五十一章につぎのようにかいてある。

When having achieved success as a dramatist, I determined to devote the rest of my life to play-writing I reckoned without my host. I was happy, I was prosperous, I was busy, my head was full of plays that I wanted to write; I do not know whether it was that success did not bring me all I had expected or whether it was a natural reaction from success : I was but just firmly established as a popular playwright when I began to be obsessed by the teeming memories of my past life. The loss of my mother and then the

break-up of my home, the wretchedness of my first years at school for which my French childhood had so ill-prepared me and which my stammering made so difficult, the delight of those easy, monotonous and exciting days in Heidelberg, when I first entered upon the intellectual life, the irksomeness of my few years at the hospital and the thrill of London; it all came back to me so pressingly, in my sleep, on my walks, when I was rehearsing plays, when I was at a party, it became such a burden to me that I made up my mind that I could only regain my peace by writing it all down in the form of a novel. I knew it would be a long one and I wanted to be undisturbed, so I refused the contracts managers were anxious to give me and temporarily retired from the stage.

Obsession をとりのぞくために筆をとらねばならなかつたこと（書きたくて書いたのではなく）は注目すべきことだが、同時に外的には、劇作家として人氣がでて生活が安定しはじめた時期であつた。⁸この *Of Human Bondage* が完成したのは1914年であるから、その五・六年前の1908年には彼の四つの劇、*Jack Straw*, *Mrs. Dot*, *The Explorer*, *Lady Frederick* がロンドンの劇場で同時に脚光をあび *Punch* にも Shakespeare が舌をまいている漫画がのつた程度で、文字通り劇作家としての最初の成功のさなかにあつたのである。したがって、こゝにのべられているように反動的に過去の思い出、特に痛切な悲劇的事件が心の間隙をぬってはっきりと意識されたと考えられる。そして、又、*The Summing Up* の第五十章につきのように書かれているのとまったく符合するのである。すなわち、作家にとって成功がいかにか有害であるか（たとえ、それに無関心でいられないとしても）というところから出発して、作家の職業上の不利益・困難等を相殺してくれる利点が芸術活動にあることをといた意見である。前に引用した箇所が五十一章だから脈絡的にはその枕にのいたものとみられるので当然なことともうけとれるが、彼のカタルシスの問題との関連で引用することにする。

For the disadvantages and dangers of the author's calling are offset by an advantage so great as to make all its difficulties, disappointments, and

maybe hardships, unimportant. It gives him spiritual freedom. To him life is a tragedy and by his gift of creation he enjoys the catharsis, the purging of pity and terror, which Aristotle tells us is the object of art. For his sins and his follies, the unhappiness that befalls him, his unrequited love, his physical defects, illness, privation, his hopes abandoned, his griefs, humiliations, everything is transformed by his power into material and by writing it he can overcome it.⁹

このことは、Maugham だけに特別にあてはまるわけではないが、この作を一読すれば、his sins 以下のことどもは、Philip のたどった道とまったく同じなので、少し性急に言えば、彼の創作態度は、この Aristotle の芸術論の定石をまもっていることになる。だから、これを普遍的なこととしてとらえれば、当然多くの読者にうけいられる要素をこの作品はもっていたわけで成功は自明だが、自己の問題として、その内面の暴露のみを目的とした作品で、しかも極端に言えば、読者を予想しないで書いた作品ともなれば、(勿論、この作品は発表当時は注目されず価値をみとめたのは T. Dreiser だけであつたし、あとで出した *The Moon and Sixpence* がもてはやされてからかえりみられたわけだが) その大成功を複雑な気持でむかえたことと思う。特に、作家が悲劇的存在であるということは普通人の論理をこえた定義であるが、彼の前半生は常識的にも文字通り悲劇的であり、そのため Maugham は作家としてもその性格の内向性から、一般の作家以上にその obsession は痛切なものであつたろう。又、この *Of Human Bondage* に関連して言えば、その obsession を促進したものとして、23才頃 *The Artistic Temperament of Stephen Carey* という同一テーマの作品が中絶のかたちでうちすてられてあつたので、これを完成したいという気持があつたことも忘れてはならない。

3

ストーリーは *David Copperfield*, *The Way of All Flesh*, *Sinister Street* 等の小説の一般的な型にしたがって展開されているが、主人公のえがき

かたが、だいふ、それらの作品とはことなっている。主人公は弁護もされず、その欠点すなわち、彼の異常なまでの感受性・自己憐憫・利己主義・頑固さ・非社交性がいかんなくさらけだされている。自分を理想化するなどは論外で、徹頭徹尾、自分をいためつけるというマゾヒスティックな態度である。Mildred との関係においてもそのとおりで、必要以上に自分を窮地におとし入れていく、そうしなければおさまらない性格にたてられて、その異常さにはただただ啞然たるばかりである。又、株式で大損し貧困にあえいた時、遺産を欲して叔父の死をのぞむくんだり、その非人道的、醜悪な主人公をとおして、それを冷笑している作家の眼を意識させるのである。母親の死からはじまるその悲惨な幼年時代の話は、Maugham が *A Writer's Notebook* の序文にのべている Jule Renard の *Poil de Carotte* に対するつぎの意見を想起させる。

He wrote several novels, of which one, *Poil de Carotte*, was very successful. It is the story of his own childhood, the story of a little uncouth boy whose harsh and unnatural mother leads him a wretched life. Renard's method of writing, without ornament, without emphasis, heightens the pathos of the dreadful tale, and the poor lad's sufferings, mitigated by no pale ray of hope, are heartrending. You laugh wryly at his clumsy efforts to ingratiate himself with that demon of a woman and you feel his humiliations, you resent his unmerited punishments, as though they were your own. It would be an ill-conditioned person who did not feel his blood boil at the infliction of such malignant cruelty. It is not a book that you can easily forget. Jule Renard's other novels are of no great consequence.¹⁰

Of Human Bondage を書いていた時、早くからフランス文学にしたしんでいた彼のことだからこのままの感慨にふけていたであろう。又、母親の死が痛痕事として死後六十五年以上たってもいやされなかった幼年時代を脊おっている彼は、その回想と Renard の少年時代とが交錯して、あつき涙にくれたのではないかと思う。この作品を特徴づけている坦々たる文章もこの Renard の悲劇の語り方のスタイルから何らかの示唆をうけていたのではなからうか。

この意味でもこの本は『忘れがたい本』となったのである。

Philip の幼少年時代の性格の展開は、幼少年心理学の適用をうけるほど、単調な心の起伏とみられるふしもあるが、蝦足からひきおこされる内心の葛藤から神への不信に至る過程は、作家の吃りの体験にもとづいているだけ描写は的確・真摯でそくそくとせまるものがある。Philip は自分の肉体上の欠陥に対する嘲笑により、無心から苦渋にみちた自己認識へと成長するがその成長は、普通の子供よりも早かったし、人生の通常の場合にあてはまる既成のルールでは律しきれない面が彼にあったし、いやでもおうでも彼自身での解決をせまられるのである。そのような彼は、聖書の『何にしても信じ求めればことごとくうべし』という文句にも、聖書の言葉の背後に何かしら不可思議な神秘的な意味がふくまれていることに感づいていたのだから、唯々諾々とうのみにするわけにはいかず、牧師である叔父と意味深い宗教問答をかわしたのである。叔父のすげない紋切り型の返答には聖職者としての権威からくるわりきった楽観的な態度、しかも、その裏を知りたい Philip の真意を無視した態度がうかがわれ、Philip はただ自らをなっとくさせ、『聞くだけは聞いてしまった』¹¹という感想のなかで真剣な祈りの苦行にはいるのである。この祈りの不首尾が以前から叔父にたいする嫌悪の情をかきたたせ、叔父との人間的な理解・和解はその死にいたるまでもたらされなかった。それは彼のキリスト教にたいする非寛容な態度とまったく平行してつづいている。Maugham の神の不信は定説となっているが、それは信仰をすてて解放感をえたという一つの論理上の帰結で神の不在証明ではないことを、まず念頭におかねばならない。この蝦足事件が、完全に宗教への幻滅の起点となったことは明白であるが、ハイデルベルヒ遊学時代に、ふたたび複雑な要素をはらんで神の絆から脱出をこころみている。不信の念を確実にする努力(?)はハイデルベルヒに来てからもたえずつづけられ、友人との宗教論争を通じて自分の信仰とはすなわち英国国教のそれであるという自覚や、しかも仏教徒、回教徒、カトリック教徒の信仰に対する確信の程度も同じであることが実際にミサに出たことによって知らされたことなどが大いにあづかって、結局は信仰の絆から解放され、皮肉にも『単なる習慣から、も

はや、信じない神にたいして思わず感謝をささ¹²げる』ことになったのである。

4

しかし、この小説を特徴づけている主人公受難の歴史は、彼をとらえ解放へとは彼をすすめない。死んだはずの神は、姿をかえ亡霊となり彼の前にたちはだかる。一つの姿はキリスト教義は捨てさりながらも、うけいれずにおれないキリスト教の徳目であり、もう一つの姿はつぎのように Maugham がえがいている。

Having settled the whole matter to his satisfaction he sought to put it out of him, but that was more easily said than done; and he could not prevent the regrets nor stifle the misgivings which sometimes tormented him . . . ; And sometimes, as though the influence of innumerable ancestors, God-fearing and devout, were working in him unconsciously, there seized him a panic fear that perhaps after all it was all true, and there was, up there behind the blue sky, a jealous God who would punish in everlasting flames the atheist. At these times his reason could offer him no help, he imagined the anguish of a physical torment which would last endlessly, he felt quite sick with fear and burst into a violent sweat. At last he would say to himself desperately: "After all, it's not my fault. I can't force myself to believe. If there is a God after all and he punishes me because I honestly don't believe in Him I can't help ¹³ it"

さて、前にあげた一つの姿であるキリスト教徳目に密接にむすびついているのに彼の紳士気質がある。この小説の普遍的魅力の一つは、特定の階級意識を背景にちらつかせ、それが何らかの力となっている作品に比較して gentleman 意識の人間から、すはだかの人間への脱皮を意図している点にある。求めているのが魂の発展であり、Philip の紳士意識はすでに読者のものであり、読者も Philip とともに洗脳をうけるのである。この意識はぬげきれないものとして彼の悲劇的性格の底流にある。ハイデルベルヒ遊学は、パブリックスクール、

Oxbridge への正規のコースをうけられなかった劣等感の克服ともみなされるし、¹⁴パリーでの画業修業のくだりは、彼の性向とはいえ、趣味人・教養人への志向のあらわれであると考えられる。又、貧窮の末、よんどころなく Lynn and Sedly 商会の案内係をつとめた時もその condescending な態度はスノビズムにちかい。Mildred とのくされ縁のはじまりは、Philip が gentleman であるから好意をよせたと彼女に無残に宣告される。彼女との黒い絆は、どうにもならない情念のみならずこの紳士意識とキリスト教徳目のなせるわざである。餓死寸前に自殺をも考えた彼が、無料給食所の門をくぐれなかったのもこの絆のためである。ハイデルベルヒ時代、友人のアメリカ人 Weeks との対話からでてくる紳士の定義、すなわち分離派でないこと、イギリス人にかぎること、親が紳士であること、パブリックスクールから Oxbridge へとすすむこと、紳士らしい英語を話すこと、身につけるものがおかしくないことなどをあげているが、これらをとおして Maugham 自身紳士たるべきことをあざ笑っていると考えられ、しかも、これがキリスト教徳目とからみあってはらいきれなかったところに Philip の悲劇があったわけである。しかし、逆にこれが他の友人たちの根なし草的生き方にたいして、Philip の生活に一つの根柢を与えていることはいうまでもない。彼等は破滅的であり、Philip は摸索的で常識的であるのだ。Mildred に愛情をなくしたあとですらその苦境をみては以前の彼女の態度にもかわらずその生活をみてやるのも、全面的理由でないとしてもこの Philip の背後の十字架によるものと思われる。初恋の狂暴な情熱の劫火に焼かれている主人公の態度からすればそうなるのが理くつだということではすまされないものがある。読者は、その主人公の態度になんともいえないはがゆさを感じながら、そう感じるが故に、なおさら彼に試煉がくわわり、新生した人間の毅然たる態度を一べつしたく、Sally との円満な結末に不満を感じるのである。ともかく Mildred との関係は男女の間の愛情の不条理の極をあらわしている。Sally という母性的な女性にめぐりあい平和な愛情にひたりながらも、Mildred らしき女のうしろ姿をみて思わず胸をとどろかすにいたっては、もはや一つの執念が完全に Philip を支配しているので宿命的な人間の絆を感じさせるもの

であり、紳士気質も、キリスト教徳目も、理性も智慧も関与しない人間の業の深さといったものをまざまざとみせつけられるのである。

5

さて、もう一つの姿の神をうしなつたあとのこる不安については、すでにのべたようにキリスト教という一宗教にたいする幻滅があつた蝦足事件の結末で、神の不在証明ではなかつたことと、Maugham の *The Summing Up* における神についての感慨、すなわち神の問題は人間の本質的なものであり、絶対的なものにあこがれ、これにすがりたいのは人間の本能であり、信じてはならぬ理由もないし、頭で否定し心で肯定しなければならぬこのジレンマも前の情念と同じく、理くつでは解決できない不条理な一つの姿であることとする、この二つのことと関係がある。さてこのような不条理な存在としてのMaugham は、神をうしなつたあとの不安の中にとざされて、これからの脱出の道はふさがれてしまったかどうかがつぎの問題となつて残る。そこで筆者は彼の有名な人生模様の人生観をここで持ちださねばなるまいと思う。要するに人生には意味がないという東洋の無常観に通じるものであり、すべての人生の出来事がタテ糸、ヨコ糸となつて織りなして、ペルシャじゅうたんによつて示される人生パターンが出来あがるという見方である。これは総括的な間然されることのない一つの見方で結局は各個人が生れ、結婚し、死ぬというこの作中でしばしばいわれているシンプルなパターンと一致するであろう。ただその模様は各人各様である。その為 Cronshaw は Philip がペルシャじゅうたんのどこに人生が象徴されるかと聞いても答えず、自力で探し出すように提案したのは当然である。一方では人間の存在の不条理をみとめ、人生の無意味さをさとり、かつ神をうしなつたあとの不安にさいなまれている、いわば危機感をともかくもこのような人生観で、はぐらかさねばならないのは、やや突発的だが英国的ヒューマーのあらわれに思える。そのヒューマーというのが価値感の転換によつてえられるものとすれば、まさにこの人生観こそそれそのものであるといわねばなるまい。こういう意味において、彼の不安な、空虚な魂はこの人生観によつて大い

にいやされたと考えられる。しかも、Maugham の場合、苦難をへたあとの、あきらめにも通じる静けさが彼のいくつかの作品にただよふような気がするので、摸索的魂の careerist である Philip への、人生にはすくなくともこのくらいの補償作用が行なわれるのだとする、楽観的立場にある Maugham のせめてものおくりものではなからうか。Sally という女性もおくりもの二番手であろう。ここで、いままで故意にふせておいたこの人生模様の人生観のしめすもう一つの面について別の角度から論じなければならぬ。前にもふれたようにこの人生観は特別のものではない。生れて死ぬということに帰着すると思うのであるが、人生そのペルシャじゅうたんをもって人生を象徴するというのが Maugham 的であり、彼の美意識の志向をはっきりと示しており、人生は一方では無意味であるという真理は真理とみとめ、一方では美的完成を目ざさねばならぬというのが、この作の一つのテーマである。ここで Maugham は自然におりなされた各人の美的パターンを勿論みとめているが、同時に美が善行という道徳的生き方、特に我執の絆から脱した没我的行為の中に一番強く生きつづけるという考えから Maugham は美的パターン完成に善きことという積極的な裏うちをほどこしている。だから無意味な人生だとしても、私は若い、与えられた生を雄々しく生きていかねばならぬとする心の暗うつをふきとばす生への執着は当然彼の人生模様の完成に必然的なものとなる。若さからくる生命力の強さはもちろんのことではあるが。それだから、理くつのあわぬ Mildred にたいするはがゆいほどの行動も、このような Philip の心の起伏の結果で愛することをすべてとする没我的な善へのあこがれが意識下にあったからである。美はうつろいやすいものと考えている一方、普遍性・永久性のある価値として *The Summing Up* で考えているのも肯定される。Maugham の他の小説でも没我の美を称讃している例は多い。一、二例をあげれば *Liza of Lambeth* の中で Liza をはらませた妻子ある Jim が彼女の死の床で自分の罪を告白し、彼女の不幸を悲しむところ、又、愛をしりぞけられながらも善意にみちた愛をかえなかった Tom 青年、又、*The Moon and Sixpence* で妻をねとられながらも、異常な程の善意で Strickland に真心をつくす Dirk Stroeve である。*Of Human Bondage* で

も Mildred と対照的な善意没我の女性 Sally との結婚は偶然ではないのであり、美的善的な人格完成追求へのあらわれであるということが出来る。しかし、Maugham は善きものは美であるが美しきものは必ずしも善ならずということに注目している。彼の短篇にも美の呪いといったのを感じさせるいくつかがあるが、この作品では画学生、Fanny Priceが自分の美的天才を信じこんでいるその我執によってしばられた状態からの離脱は自殺によってなされ、Hayward は自分の信じる美の奴隷となり、人生のむなしさを教えてくれた詩人Cronshaw は酒にひたりみとる人もなく淋しく息をひきとるといった、美にとりつかれた暗澹たる人生風景が Philip の周囲に展開されている。しかし、ともかく、人生の定義をペルシャじゅうたんに与えたのは美の価値について『人生に意味を与えるものは美のみであり、…芸術作品こそ、人間活動の最高の産物でありあらゆる惨めさ、人類のはてしない労苦、無益の努力を正当化する最後の根拠である』と確信している若き¹⁵芸術家 Maugham の一つの精神的¹⁶痕跡であって¹⁶けて偶然でなかったことを忘れることはできない。

ここで興味深いことはこれほどの悟りの境地に達した人生観の持ち主でも、人間そのものの複雑さ矛盾さには手にあまった様子で、その結果、彼の人間観がシニクであるといわれることになる。しかし、一方、我執のない善意の人間をほめるには人後におちないことはすでに知れるとおりであるし、叔父Carey に対する最後まで許すことのできなかつた Philip の気持は Maugham その人の実感であって、叔父の非人間性にたいする反感もさることながら、そういう聖職者をつくりだした神そのものへの攻撃となっていることもいなめない。又 Mildred をとおして、やさしさの中に獣性をひそませ、魔性を発揮する女性への蔑視の感情は、人生観とは別の次元の人間観であり、要するにMaugham の場合、その人生観の基盤にたつて、人間観、芸術論、世界観がそれぞれ独自に展開されているということが出来る。ただ、人生観、人間観とは相互依存の関係にあり、彼の人生観からすれば、人間の無意味な存在・行動のみが眼についてともすれば冷笑的な態度になるのもいたしかたのないことである。とにかく、この作中では、Carey, Mildred 以外の人物には cynical な見方をとっていない

ようである。それというのも、他人の人間性の矛盾にぶつかり自己を露呈し、自分を認識するというくりかえしの歴史をえがこうとする作家の気持が強く、そうさせているのかも知れない。

6

ここで、ふたたび最初にもどって *obsession* をとりのぞくために、やむにやまれず筆をとったわけだが、はたしてこれが成功したであろうかどうかについて一言したい。この疑問に関連した Maugham のかくれた一面を知る興味深い記事が R. Cordell 氏の *Somerset Maugham* の中にあるのでのぞいてみよう。

Since its publication he has opened the book (= *Of Human Bondage*) only once — in 1945, when he was asked to read the first chapter for a recording for the blind. ‘I did not make a very good record of it because I was moved; not because the chapter was particularly moving but because it recalled a pain that the passage of more than sixty years has not dispelled.’ As a matter of fact, when he was reading the chapter in the studio, he broke down and wept and was unable to complete the recording at this time. This touching incident leads one to wonder whether writing *Of Human Bondage* provided a thorough catharsis after all.¹⁷

これは、Maugham の人間性の一面を知る得難い記述ではあるがあまりに性急にすぎる結論をくだしているようである。なぜなら本質的には善でも悪でもないものでも、それに有害な連想がまつわれればその再来・再現はのぞまれない。その連想があまりにも苛烈であるからでそれは本能的ともいえる嫌悪の情でどうにもならない。そういうことは何回も生涯をとおしてくりかえされるもので、一回きりということはない。演劇の場合、同じ材料がたえず我々にカタルシスをもたらすことはすでに経験済みである。obsession になやまされるのは精神病的には内向的人間に多いとのことだが、Maugham がそのような人柄であることは周知であり、作中でも、そのような人物に並々ならぬ愛情を Maugham は感じているようであり、材料をえて相当の時日ふとこころにあたた

めて小説をかく彼にはその材料がその間にたえがたい *obsession* に感じられる内面的要素がかくされているようである。Mildred が悪女の最たるものとえがかれたのは彼の実際の女性体験からの *composite* だが、このような若い時の体験はやはり Maugham の血肉となり、彼に涙を流させたのも彼が *humane* であり、彼を残酷・シニカルであるとする世評をどんでん返しした好例であり、作中でよく見られる善人が悪人に、悪人が善人というケースを地でいったかたちである。Maugham が涙を流したのはドラマに感情を移入して、いわば身につまされた一観客の率直な態度であり、その点では、*obsession* を除去し得なかったが、同時に自らの所産によってカルタシスを味わうという皮肉な事態をしめしたのである。それでもなお、前にも引用したが『そうしたなやみや、不幸な思い出から永遠に解放された気持になった。私はその時知っていたあらゆるものをこの一篇にそそぎこんだので、ついに書きあげると新たな出発への準備をした』とは長い陣痛のあとやっとうみおろした母親にも似た、芸術家一般につうじる一つの安堵感であることにはまちがいなかるう。

註

1. *Maugham Reader*, Doubleday, 1950. G. Wescott の序文がついていて、R. T. Stott, *The Writings of W.S. Maugham*, 1956. によると *The* がない。
2. W. S. Maugham(ed.)*Teller of Tales*, Doubleday, 1939.
100篇の短篇集で英国・アメリカ合衆国・ロシア・ドイツから Maugham が選んで序文を書いている。
3. R. Cordell, *Somerset Maugham*, Heinemann, 1961.
4. *Ibid.*, p.84.
5. *Show*, the Magazine of the Arts, Hartford Publications, Vol. II, No. 6・7・8, 1962.
Looking Back という題名で連載された。
6. W. S. Maugham, *The Summing Up*, LI.
7. *Ibid.*, LI.
8. 金は人間の第六感みたいなもので、これなくしては、他の五感がうごかないということを書いて貧困をのろっているが、主人公 Philip のように自殺寸前におちいったことは実際とは無関係で、自分のエンジョイしたいものを得ないという見地からの貧乏で要するに、程度問題で深刻なものではないことを一言する。

9. W. S. Maugham, *The Summing Up*, L.
10. W. S. Maugham, *A Writer's Notebook*, Preface.
11. W. S. Maugham, *Of Human Bondage*, XIV.
12. *Ibid.*, XXVIII.
13. *Ibid.*, XXVIII.
14. Philip は画の修業をしたが Maugham にはその経験がない。R. Cordell 氏は、前掲の書の74頁にふれている。
15. W. S. Maugham, *The Summing Up*, LXXV.
16. 痕跡としたのは、ここの引用した言葉のすぐあとでこの考えをすてたよしを明言しているからである。
17. R. Cordell, *Somerset Maugham*, p.71.